量子カオスとしての Sachdev-Ye-Kitaev模型 とブラックホール

素粒子論研究室
17SS208B
西村 滉祐

Contents

- Sachdev-Ye-Kitaev 模型
- SYK模型と量子カオス
- スペクトラル形状因子の起源
- まとめ、今後の展望

Sachdev-Ye-Kitaev 模型

SYK 模型とは

$$H = \sum_{i,j,k,l} J_{ijkl}\ \psi_i(t)\psi_j(t)\psi_k(t)\psi_l(t)$$

J_{ijkl} 値がガウシアンの確率分布に従う結合定数

ψ_i マヨラナフェルミオン

- 元々物性理論の分野の模型（スピングラス）
- Alexei KitaevによりAdS/CFT対応が期待される模型として提唱された

SYK 模型の性質

- ラージN極限において強結合領域で可解となる
- 低エネルギー極限で共形対称性を持つ
- アインシュタイン重力と同じだけカオスである

→ ホログラフィック原理が期待される理論の中でも調べやすい模型

1

SYK ⟷ JT gravity = dilaton theory

1次元CFT

2次元AdS

SYK模型と量子カオス

量子カオスを調べる道具

1. 時間順序外相関関数(OTOC)
    - 4点関数の１つ
    - 初期の振る舞いは指数関数的に増大する

2. スペクトラル統計
    - 複数の固有値の相関を調べる
    - 系のlate-time での振る舞いを調べるのに使われる

SYK模型とランダム行列理論

量子カオス理論の基本的な仮定：

量子カオス系のスペクトラル統計を記述する数学は**ランダム行列理論**(Random Matrix Theory: **RMT**)である

SYK模型とランダム行列理論

- RMTとはある統計集団に属する乱数の行列の理論
- SYK模型もRMTで記述されると考えられている
- 重要な量のひとつに**スペクトラル形状因子**というものがある
- スペクトラル形状因子はSYK模型でもよく調べられている

スペクトラル形状因子の定義・性質

$$g(t) = \frac{\langle |Z(\beta - it)|^2 \rangle_J}{\langle Z(\beta)^2 \rangle_J}$$

- エネルギー固有値の2点関数
- 古典重力で計算すると値は0に落ちるだけ
- 量子論では離散スペクトラムにより違う振る舞いをし、時間が経つとある平均値のまわりを揺らぐようになる

定義・性質

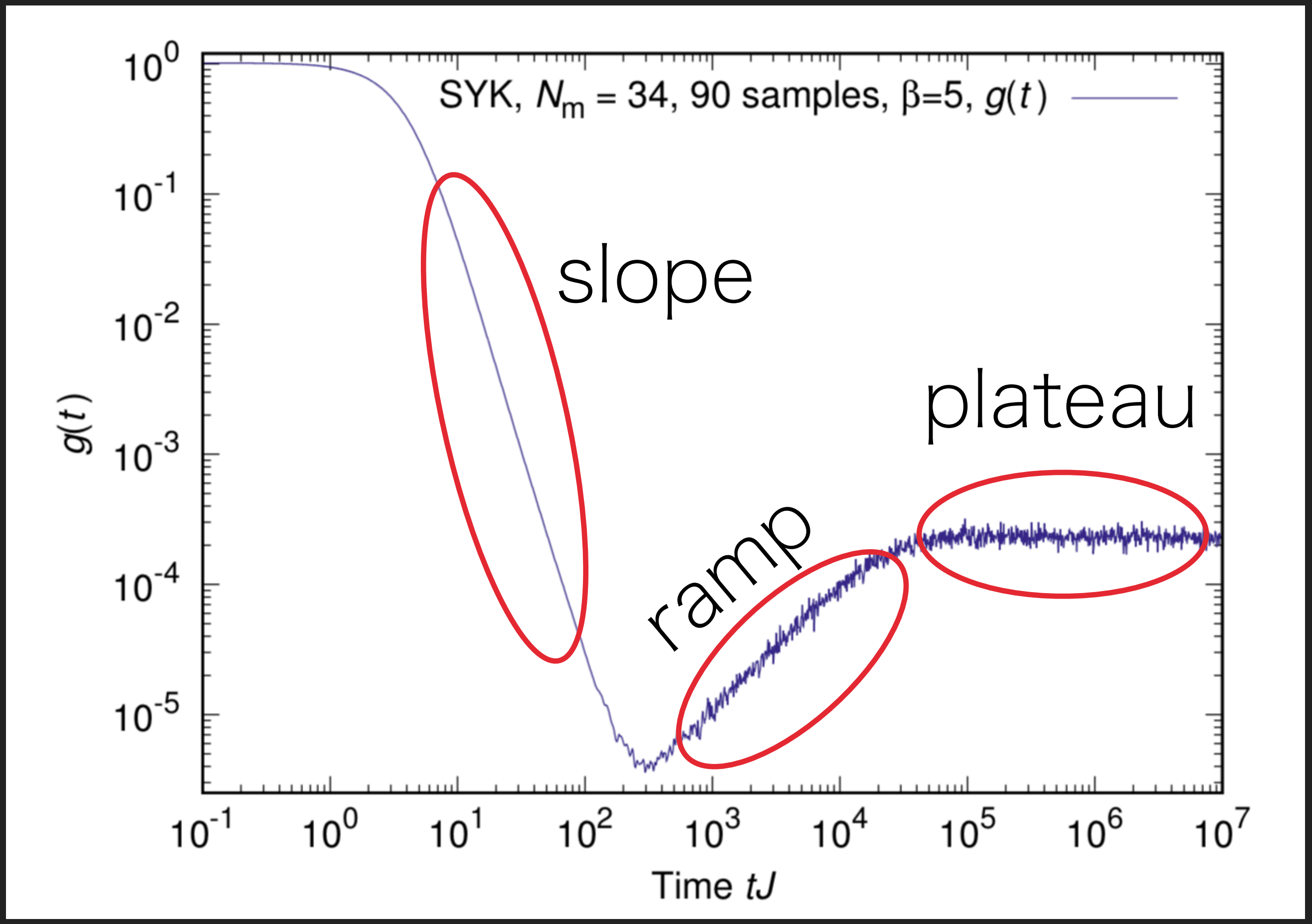
$$g(t) = \frac{\langle |Z(\beta - it)|^2 \rangle_J}{\langle Z(\beta)^2 \rangle_J}$$

- SYK模型は量子論なのでスペクトラル形状因子は量子論に特有な振る舞いをする

➡ AdS/CFT対応を期待するならば、詳細を調べる事によって量子重力系の振る舞いを理解できるはず

SYK模型のスペクトラル形状因子

- slope, ramp, plateauという3つの領域からなる
- rampは時間に比例している
- plateauは離散スペクトラムの存在によるもの



J. S. Cotler et. al.

スペクトラル形状因子の起源

スペクトラル形状因子の起源: SYK

- どのような場の配位が分配関数の経路積分に寄与するか？

$$g(t) = \frac{\langle ZZ^* \rangle_J}{\langle Z^2 \rangle_J}$$

- 計算には<u>レプリカ法</u>が用いられる

$$Z \longrightarrow \text{R系} \qquad Z^* \longrightarrow \text{L系}$$

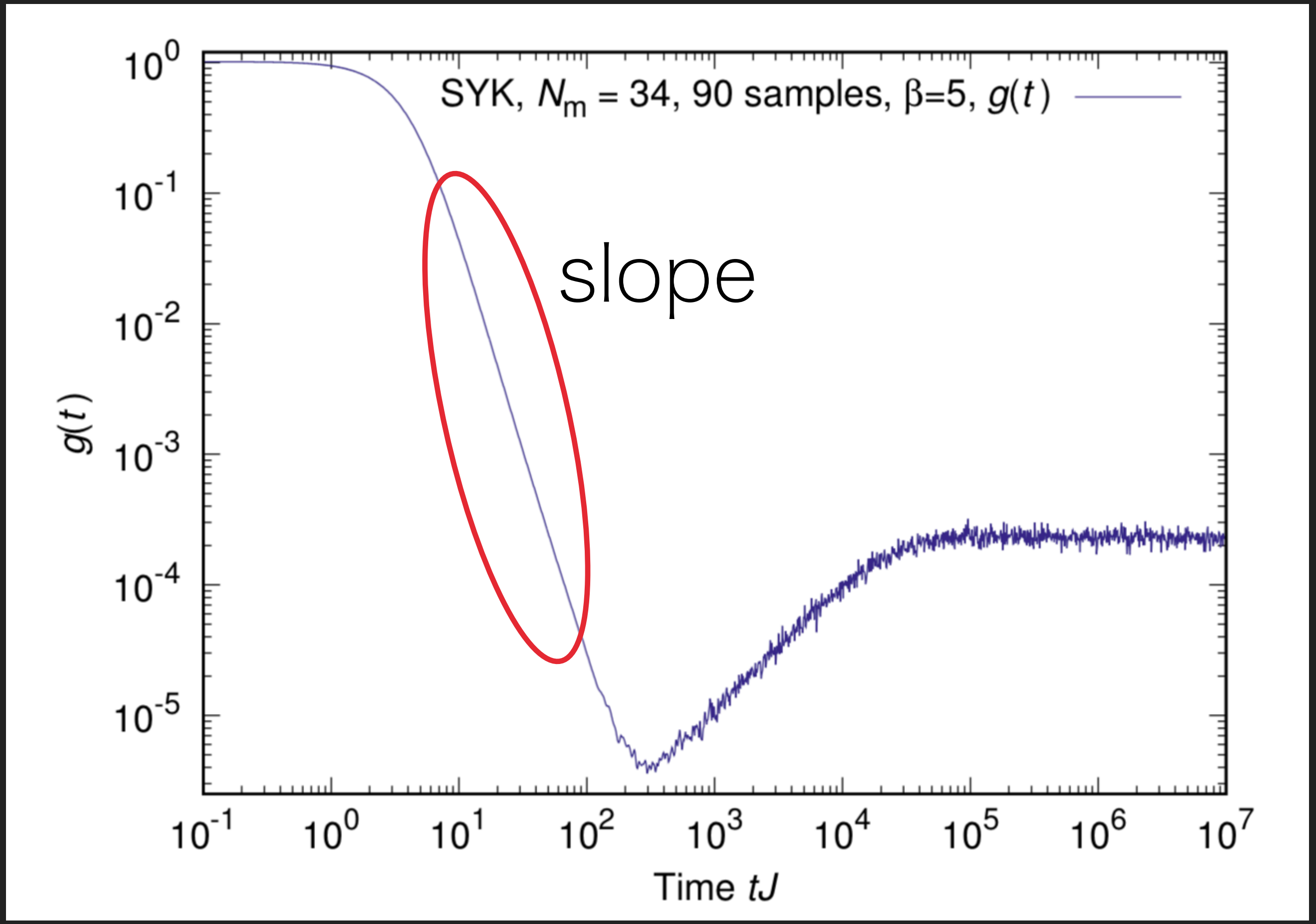
JT 重力のスペクトラル形状因子

- SYK模型と同様に2つのレプリカL系とR系を用意する
- JT重力では<u>計量テンソルの配位</u>を調べる

SYK模型の解の配位に対応する幾何学はどれか？

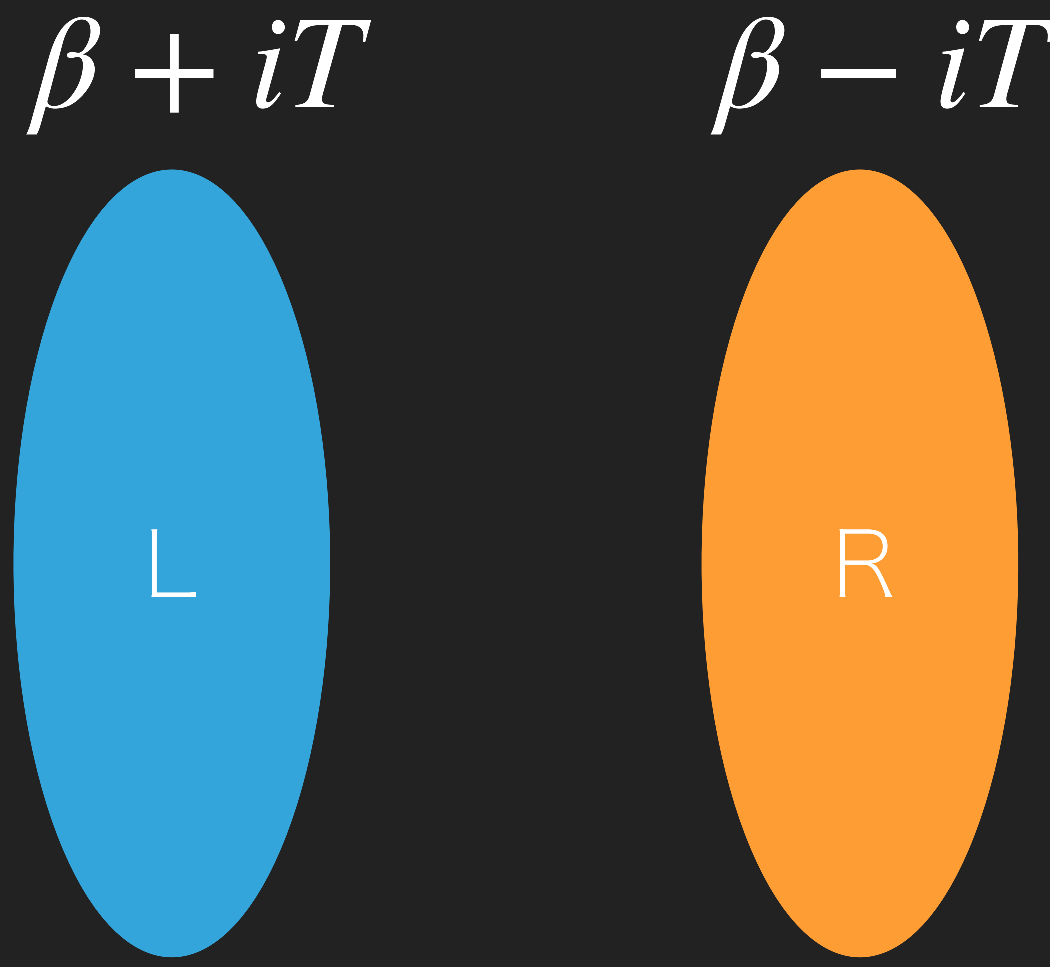
SYK模型のslope

- slopeを構成する配位はL系とR系に相関がないようなもの



JT重力のslope

Euclidean black hole
diskのトポロジーを持つ

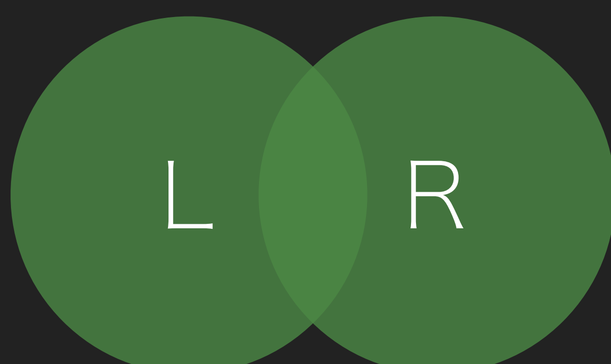


L系とR系に繋がりがない

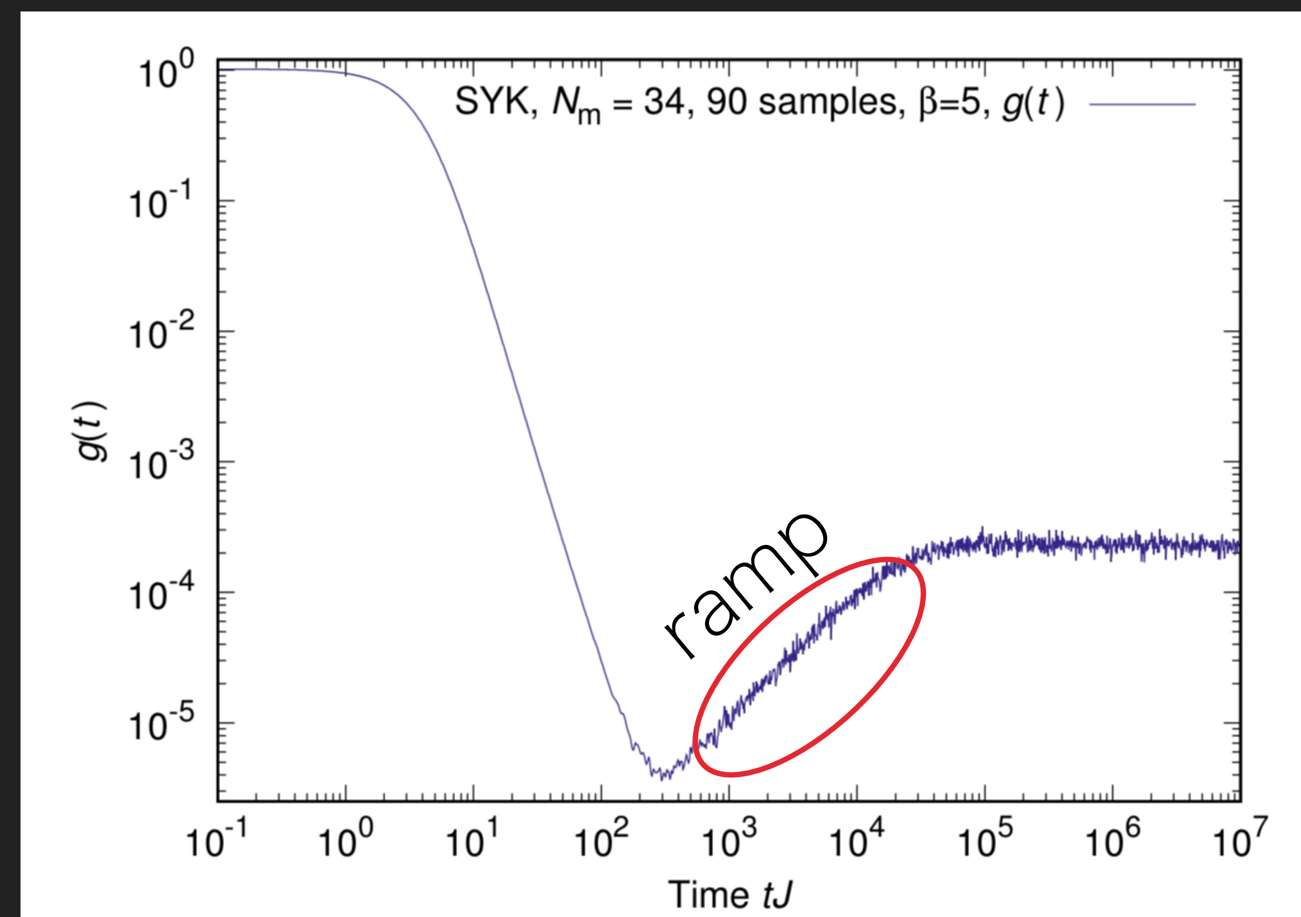
SYK模型でのslopeに対応

SYK模型のramp

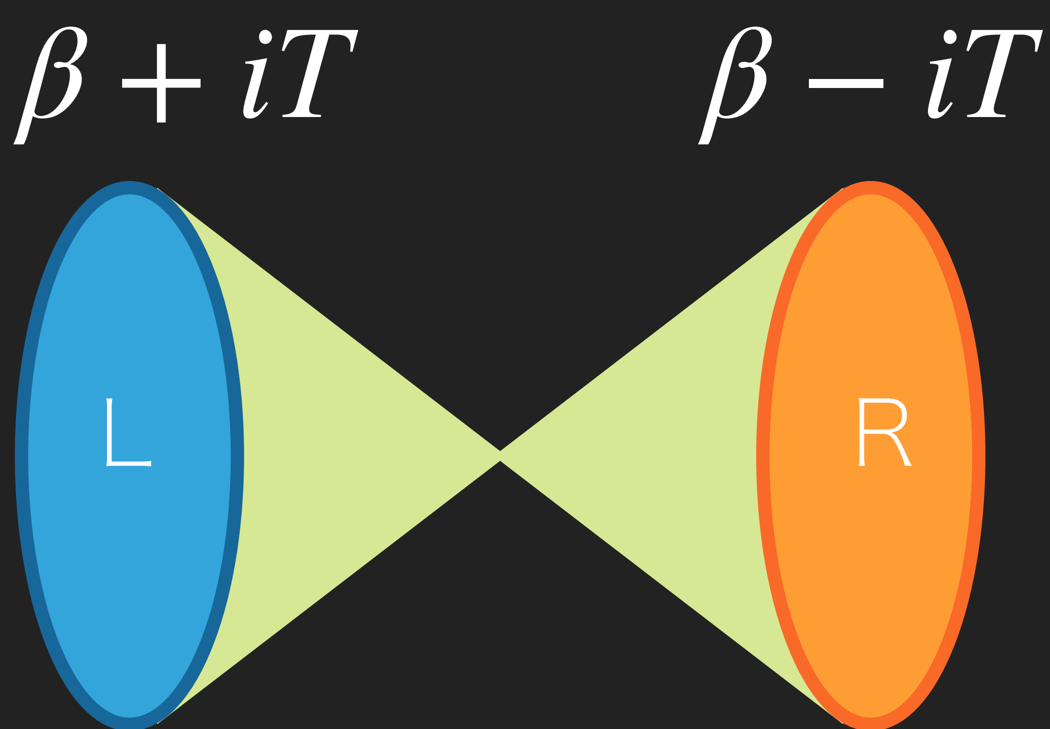
- rampを構成する配位はL系とR系に相関があるようなもの



- 特にL系とR系が独立に持っていた時間並進対称性を自発的に破る



JT重力のramp



- L系とR系をつなぐLorentzian wormhole
- この解は計量の持つ時間並進対称性を自発的に破る

SYK模型でのrampに対応

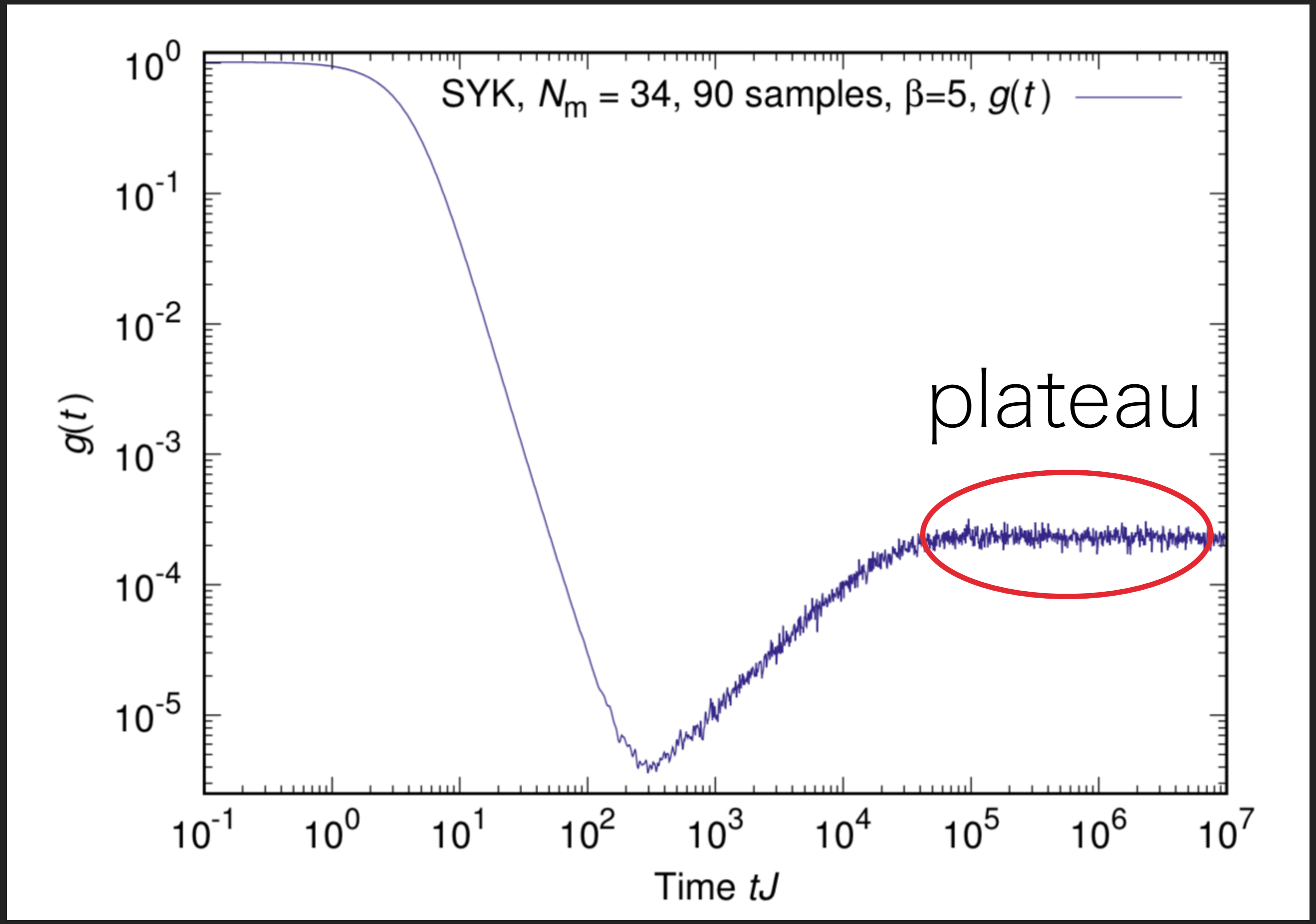
plateau: どの配位が寄与するのかは不明

SYK:

- ある種のD-braneによる非摂動効果？

JT 重力:

- 高いgenusを持つトポロジーの計量による寄与？



まとめ

- SYK模型はNAdS/NCFT対応の期待される量子カオス系であり、重力双対は２次元AdSディラトン重力である
- 量子カオス系の統計的構造はRMTで記述されると思われており、SYK模型もRMTに従っていると期待される
- SYK模型と、その重力双対理論のスペクトラル形状因子のslope, ramp領域の物理的起源は対応している

これからの展望

- SYK模型やJT重力のplateauの物理的起源はまだ不明
    - きっとそのうちP. H. Shenker, P. SaadやD. Stanford達が論文出してくれるはず
- RMTにおけるplateauの非摂動効果の解析は奥山先生が年末に行った
    - eigenvalue instantonによってplateauの傾きはゼロではなく有限になる

これからの展望

- JT重力理論はSYK模型のような乱数で与えられる結合定数がないので、これによる期待値というものが存在しない
- もしJによる期待値を取らないと、SYK模型ではplateauは大きく揺らぐ
- 今回の重力の解析ではこの揺らぎが見られず、揺らぎの起源は不明

$$g(t) = \frac{\langle |Z(\beta - it)|^2 \rangle_J}{\langle Z(\beta)^2 \rangle_J}$$

$$\Downarrow$$

$$g(t) = \frac{|Z(\beta - it)|^2}{Z(\beta)^2}$$

Back up

シュウィンガー・ダイソン方程式

シュウィンガー・ダイソン方程式：

$$G(\omega) = \frac{1}{-i\omega - \Sigma(\omega)} \qquad \Sigma(t) = J^2 G(t)^3$$

G ：2点関数 Σ ：自己エネルギー

カオスとは何か

カオスの研究の始まり

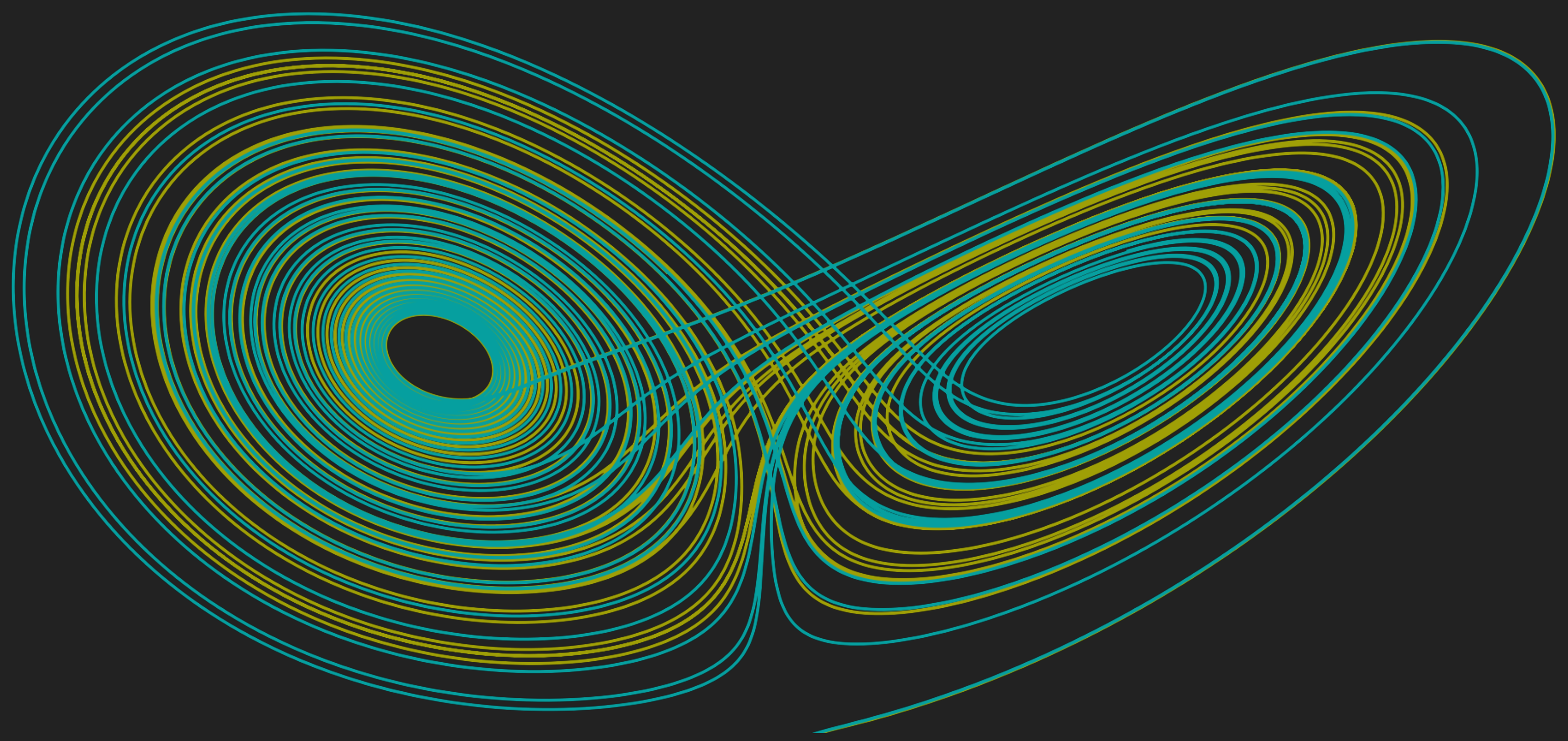
- アンリ・ポアンカレの3体問題に関する論文が起源
- 特殊な場合を除き安定軌道が存在しない
- 3体系はカオスである
- 我々の太陽系は安定か？

古典カオスの定義: バタフライ効果

- 解の初期条件をわずかに変えただけで軌道が大きく変わる
- 変化の割合は指数関数的に増大する

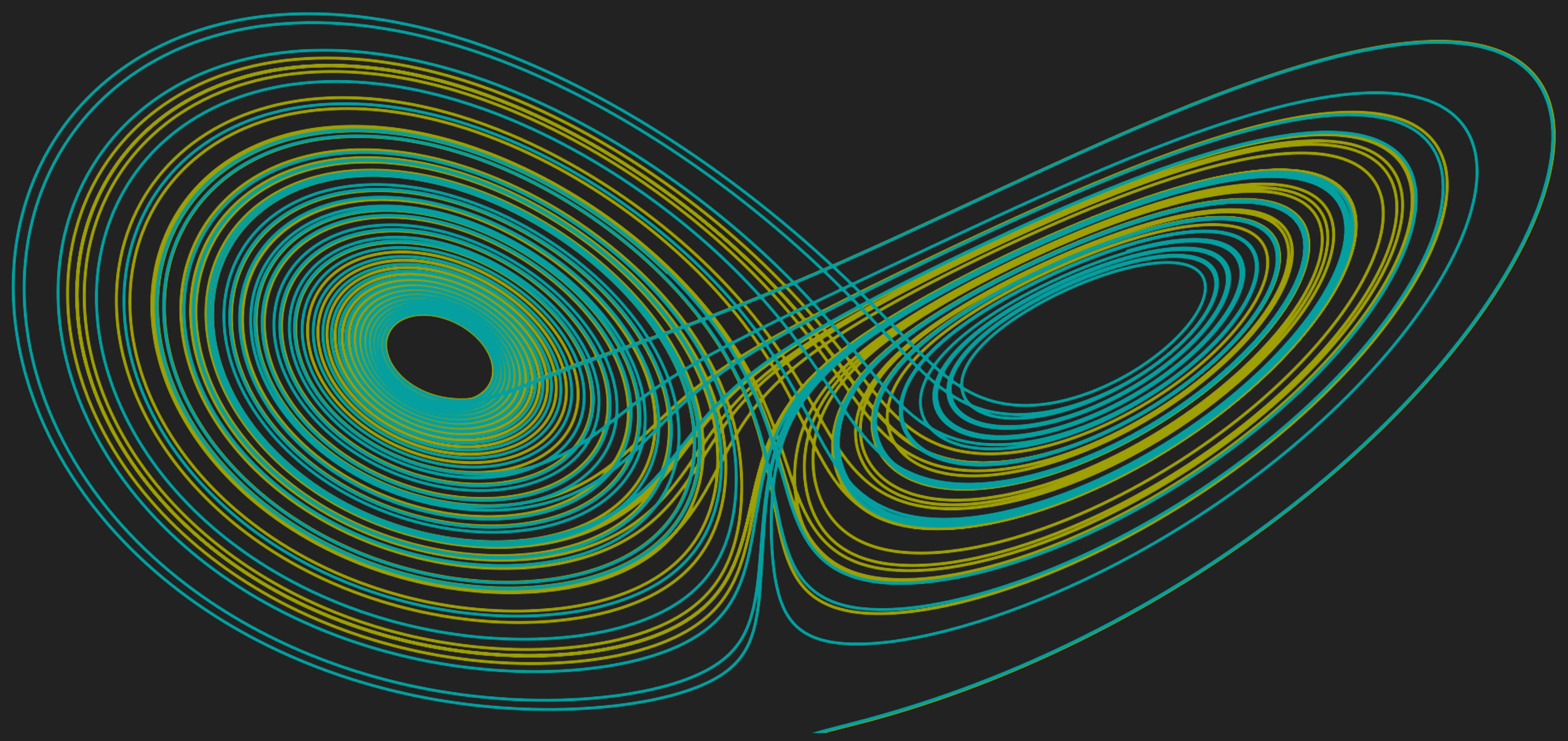
$$\frac{\delta x(t)}{\delta x(0)} \approx e^{\lambda t}$$

例: ローレンツカオス



$$\frac{dx}{dt} = \sigma(y - x) \qquad \frac{dy}{dt} = x(\rho - z) - y \qquad \frac{dz}{dt} = xy - \beta z$$

例: ローレンツカオス



- 黄色と青の線は初期値を0.1だけずらしている
- 最初の方は重なっているが、渦の部分は綺麗にずれている

量子カオスとは何か

- 量子論なので古典カオスのような位相空間での定義は不可能
- 量子カオスの性質を調べる道具:

1. 時間順序外相関関数(OTOC) $C(t) = \langle [V(t), W(0)]^2 \rangle$
2. スペクトラル形状因子 $g(t) = \dfrac{\langle Z(\beta - it)Z(\beta + it) \rangle}{\langle Z(\beta)^2 \rangle}$

量子カオスの分野の意義：普遍性

- 量子カオスは一見して関係なさそうな広いクラスの量子系に渡ってある統計的な振る舞いとして見られる
    - Rayleigh 分布に従う散乱問題における縦波の強度
    - 重い原子核同士の衝突による中性子散乱問題における Ericson ゆらぎ
    - カオス量子ドットのコンダクタンスゆらぎ

量子カオスの分野の意義：普遍性

- 広いクラスの問題に応用できる
    - 重い原子核内の陽子中性子共鳴
    - 非可換ゲージ背景場のDiracスペクトラム
    - 原子や分子のスペクトル
    - 量子情報
    - Etc…

OTOC

$$C(t) = \langle [V(t), W(0)]^2 \rangle$$

- 系の持つリャプノフ指数はOTOCの初期の振る舞いから求められる
- 交換子の中の演算子として位置と運動量を選び、準古典近似を施してポアソン括弧に置き換えると古典カオスのバタフライ効果と一致する
- OTOCはバタフライ効果を量子論に拡張したもの

スペクトラル形状因子

$$g(t) = \frac{\langle Z(\beta - it)Z(\beta + it)\rangle}{\langle Z(\beta)^2\rangle}$$

SYK 模型とリパラメトリゼーション不変性

SYK模型の作用：

$$\frac{I}{N} = -\frac{1}{2}\log\det\left(\frac{\partial}{\partial t} - \Sigma\right) + \frac{1}{2}\int_0^\beta dt_1 dt_2 \left[\Sigma(t_1, t_2)G(t_1, t_2) - \frac{J^2}{q}G(t_1, t_2)^q\right]$$

- 低エネルギー領域でリパラメトリゼーション不変性を持つ
- 特に古典解として共形対称性を持つものを選べる
- これによりリパラメトリゼーション不変性は自発的に破れる

低エネルギー極限： $\partial_t \approx 0$

SYK 模型とリパラメトリゼーション不変性

SYK模型の有効作用：

$$\frac{I}{N} = -\frac{1}{2}\log\det\left(\frac{\partial}{\partial t} - \Sigma\right) + \frac{1}{2}\int_0^\beta dt_1 dt_2 \left[\Sigma(t_1, t_2)G(t_1, t_2) - \frac{J^2}{q}G(t_1, t_2)^q\right]$$

- 低エネルギー領域では4点関数に発散項が存在する
- これを処理するには低エネルギー領域から少しずれる
- これによりリパラメトリゼーション不変性は陽にも破れる

SYK 模型とホログラフィ原理

- 低エネルギー極限ではリパラメトリゼーション不変性が自発的に破れるのでゴールドストーンボソンが現れる
- 低エネルギー極限から少しずれるとゴールドストーンボソンがシュワルツ微分で与えられる作用に従う
- このシュワルツ作用がSYK作用への主要な寄与となるため、SYK模型はこの領域では（ほぼ）シュワルツ理論と考えて良い

$$\frac{I}{N} \propto \int dt\ \{f, t\} = \int dt\ \left[\frac{f'''}{f'} - \frac{3}{2}\left(\frac{f''}{f'}\right)^2\right]$$

SYK 模型とホログラフィ原理

- シュワルツ理論はJackiw-Teitelboim ディラトン重力理論と等価である事が知られている
- 従ってSYK模型の重力双対理論は２次元AdSディラトン重力と期待される
- 厳密には共形対称性が少し破れているので、Near AdS/Near CFT と称される

SYK模型の量子カオス的性質

- KitaevがOut-of-Time-Order Correlation function(OTOC)を用いてリャプノフ指数がchaos boundを満たす事を発見

$$\mathrm{OTOC} \propto \exp\left(\lambda_L t\right) \qquad \lambda_L = \frac{2\pi}{\beta}$$

- つまりSYK模型は量子カオス系であり、カオスの度合いが強い
- Chaos boundとは有限温度の量子論が持つリャプノフ指数の最大値で、重力理論も同じ値を満たす

Jackiw-Teitelboim 重力とは

- ２次元AdS重力はトポロジカルな理論なので有限の励起状態が存在しない
- より高次元の重力理論を２次元にコンパクト化するとディラトンの重力理論を得られる
- このディラトンは余剰次元の大きさのスケールとなる